

「川崎ジュニア文化大賞」受賞作品

「私の未来、川崎の未来、図書館の未来」

久末小学校 6年 田添 愛理

二〇××年。川崎市のとある図書館。館内には当たり前のように司書ロボットがいて、自在に伸びる手で本を元の棚に戻している。また、もう一体の司書ロボットが目から出るレーザーで利用者を認識し、その人へ本のレファレンス(照会)を行っている。そして宿題スペースでは、小学生が図鑑などの資料を見たり、日本や世界の子供たちと交流をしながら宿題をしている。また別の部屋では、図書館員が3Dパネルを使った絵本を幼児に読み聞かせている。その近くには外国人利用者が世界中のあらゆる言語をあやつる司書ロボットにサポートされながら本を選んでいる。利用者はみんな笑顔で楽しそうに過ごしている……………。

突然、未来の図書館が登場して、驚きましたか。未来と聞いて何を思うかは人それぞれですが、私は未来の図書館を真っ先に思いつきました。なぜなら、私は本が好きで、その本がたくさん置いてある図書館が大好きだからです。私は、休日や放課後などの時間があると、自転車に乗って家の近くの市立図書館に行きます。するとそこでは図書館の仕事を目にするすることがあり、いろいろなことを深く考えさせてくれます。

例えば、以前、ずっと借りたかった本が私がよく行く図書館には置いていなかったことがありました。そこで、私は他の区の図書館に予約をして取り寄せてもらいました。その時、私は一つ一つの図書館は本を置いている場所というだけでなく、たくさんの図書館とつながっているということを感じて、驚きました。そして、少し見ただけでは分からないけれど、図書館は日本中、いや世界中ともつながっていくことができるのかもしれないと思い、すごいなあと感じました。

また、新聞が読めるコーナーには、その日の新聞が置いてありました。きっと、図書館が毎日配達してもらっているのでしょう。私は、ここにも「つながり」を感じました。読む人により新しい、よりたくさんの情報を早く届けたいという図書館の思いが、私の心に強く伝わりました。私はその時、図書館の利用者への心と利用者の図書館への感謝の心が「つながった」と思いました。私も図書館を利用する時には、係の人に「ありがとうございます。」ときちんと感謝の気持ちを伝えたいと思いました。

そんなことから私は、「つながる」ということについて、もっと深く考えてみました。すると、思い返せば私は小さいころから図書館とのつながりを、頭ではなくても心では感じていたのではないかと思います。言葉が分からない小さい頃から三才年上の姉と母に連れられて、図書館のお話会にひんばんに行っていたからです。ワクワクする冒険の絵本や魅力的な絵でいっぱいの紙しばいなど、毎回とても楽しみでした。小学校に入ってから、川崎市が実施している学校での読み語りで、さらに本に興味を持ちました。そして、友達と一緒に図書館に行つてたくさんある本の中から一冊一冊じっくりと本を選び、家に帰って他の事など目に入らないほど夢中になって読みました。読み終えた時は、おいしいご飯をお腹いっぱい食べたような満足感でいっぱいになりました。これからも、もっともっとたくさんの本と出会いたいです。

そして、未来の私は本を読む側だけではなく、本を読んでもらう側の作家になって、みんなに私の書いた本を読んでもらいたいです。そして、図書館と利用者の心をつないでいく「本」を書く作家になりたいと思っています。

私が作家になりたいと思った最初は、小学四年生の頃です。それまでは、ただ本が好きなだけでしたが、ある時、自分がこんなに夢中になれる本を書くことのできる作家はすごいと思い、作家に憧れを持ちました。そこから、もっと多くの種類の本を読み、本の構成や一人一人の作家の書く文体の特徴を研究したりもしました。例え

ば、『都会のトム&ソーヤ』シリーズなどを書いている作家のはやみねかおるさんは、人物のセリフや描写に豆知識や何かのパロディが多いと感じました。また、私は作家になるためには読むだけではなく、実際に書いて練習することも大切だと思い、短いお話を書くこともしています。

――20××年。川崎市のとある図書館。その館内の本棚に私の書いた本が並んでいる。司書ロボットが利用者を伴い、その本棚へレファレンスを行いにやってくる。利用者は私の本をすすめられて満足そう。そして早速読書スペースへ行き、熱心に読み始めた・・・・・・・・。

そんな未来は、遠くないと思います。川崎市は、日本でも有数の研究開発が盛んな都市だと学校の授業で学びました。この進んだ技術力を生かして、どこよりも最初に夢のような図書館をつくって欲しいです。そして、その図書館に並んでみんなに読んでもらえるような素晴らしい本を、私は書きたいです。